

『あの青い星に生きる者』

作・海山純平

登場人物

青森 ジョウ・宇宙人。地球人調査員

大和 光雄・漫画家。スランプ中。

隊長・ジョウの上司。地球人調査隊長

ウオッチ・腕時計型調査員サポートアイテム

担当・出版社に勤務。大和光雄の担当。

S E 犬の遠吠え

ドアの開閉 床板を歩く音

ジョウ「ウォッチ。コール」

ウォッチ『通信相手を指名して下さい』

ジョウ「隊長に繋いでくれ」

ウォッチ『お繋ぎ致します』

ジョウM「この腕時計型サポートアイテムは、

我々地球人調査員には有難い代物だ」

ウォッチ『電波状況が悪い為、画面は表示出来ません。音声のみでよろしいですか？』

ジョウ「え。ああわかった」

S E ノイズ音から「ポオン」という

接続音

隊長「ん？調査員ジョウかな？画面が無いが」

ジョウ「申し訳ありません。電波状況が悪い

ようです」

隊長「そうか：それで、用件は何かね？」

ジヨウ「はい。本日の活動報告を」

隊長「うむ。頼む」

ジヨウ「地球人調査員ジヨウ。本日も、調査対象足りえる地球人を人選しました」

隊長「して、その地球人は見つかったか？」

ジヨウ「いいえ。私の判断ですが…：残念ながら」

隊長「…：そうか」

ジヨウ「ルポライターという職を利用してあるので、様々な地球人と接触し易い筈なのですが、なかなか…：」

隊長「あのさ一つ言っていない？…：遅くない？」

ジヨウ「はい？」

隊長「半年以上地球に潜入して、まだ調査してないってどゆこと？」

ジヨウ「は。なるべく珍しい地球人の調査結果にしよう」と

隊長「一般人でいいから！変に拘らなくていいから！私が出した課題覚えてる？」

ジヨウ「『地球にはどのような人間がいるか調

「査せよ」でしたね。大雑把過ぎませんか？」

隊長「いいの！地球人の事がわかれば何だっていいの！その為にテーマも大雑把にしたんだから」

ジョウM「テキストな課題だと思ったが…そうか、何だっけよ良かったのか」

隊長「君以外の調査員なんて、多いので10人は調べてるよ？」

ジョウ「その調査結果は参考になりますか？」

私は真面目に慎重に調査しようと…」

隊長「君は真面目で慎重過ぎなの！…この調子だと、本部に戻して後方支援員になるが、いいかね？」

ジョウ「それは困ります！」

隊長「では、明日にはせめて調査対象を決めておくように」

SE 「ブツツ」と接続切れる

ウォッチ『通信が終了しました』

ジョウM「まずいな。後方支援なんて、パシリみたいなものだ。……何としても地球に残らねば。俺には、地球に求めるモノがあるんだ」

SE バサと本が落ちる音

近寄って拾う

ジョウM「これは確か、漫画というこの星の娯楽物だったな。地球人を知る参考に思ってた買ったが、読む暇がなくて結局……」

SE パラパラとページをめくる

ジョウ「『はちやめちやパラダイス』。ラブコメというジャンルだったか。作者は「大和光雄」。この作品で一昨年、マンガ大賞を受賞……よし」

ジョウM「調査対象は決まった。早速連絡を取り、取材させて欲しいと依頼。二日後に

日程が決まった」

S E 喫茶店

ジョウ「本日はお忙しい中お時間を頂き、ありがとうございます。ルポライターの青森ジョウと申します」

光雄「ああどうも。大和光雄です。本日は：宜しくお願いします」

ジョウM「カジュアルな髪型、服装。一言で言って地味な雰囲気だが：体型が痩せている？事前調査ではもっと太っていたが？」

ジョウ「取材前に飲み物はどうされますか？」

光雄「あの、ここでの飲食代って誰が払うのですか？」

ジョウ「私が払うつもりですが？」

光雄「飲み物以外にも注文してもいいですか？」

ジョウ「どうぞ」

光雄「すみませーん。ブルーベリーパイとフレンチトーストとチョコケーキを追加で」

ジヨウ M 「ふむ。地球人は自分が料金を払わないとわかると追加注文をする、か。いや、漫画家だけという可能性もあるか」

光雄 「最近、まともに食事ができなくて……金銭的な問題で」

ジヨウ 「受賞されて賞金を得られたのでは？」

光雄 「はは、ちょっと色々と奮発しちゃいまして、一週間であっという間に……」

ジヨウ 「何にお金を使ったか、後で詳しく聞きますね」

光雄 「訊く必要があります?!」

ジヨウ 「なぜ漫画家になったのですか？」

光雄 「急ですね!? あの、その前に僕の漫画、読まれました?」

ジヨウ 「ええ、一応」

光雄 「どうでした?」

ジヨウ 「なぜ無条件で主人公はモテるのか? なぜ主人公を好きになる女キャラは皆、見た目と性格がいいのに恋人がいないのか、というのが疑問でした」

光雄「そこはツツコまないでええ！面白かったかどうか答えて下さいよ」

ジョウM「正直、何が面白いのかわからなかったが、言わない方がいいだろうな」

ジョウ「次の話が気になるぐらい面白かったですよ」

光雄「……『はちゃめちゃパラダイス』はもう、連載終了しましたよ」

ジョウ「申し訳ありません。では、次回作はどのような作品に？」

光雄「担当さんと話し合って……グルメ漫画にしようという事に」

ジョウ「料理を美味しそうに食べて何故か無駄に盛り上がる漫画ですか」

光雄「ざっくり言いますね！？まあ、その通りなのですけど、問題がありました」

ジョウ「どんな問題が？」

光雄「あ。料理が来た？」

SE 食器がテーブルに置かれる

光雄「いただきます！」

SE カチャカチャと食器の音

光雄「んくくく！うまあーい！久々の美味い物料理だあ！（食す）」

ジヨウ「で、問題というのは？」

光雄「ああはい。さっきも言いましたが僕、金銭面に困ってましてねえ。料理の取材をしようにもお金が無くて……美味しい物に巡り合えないんですよ」

ジヨウ「今取材すればいいんじゃないか？丁度美味しい物がありますよ？」

光雄「へ？ああそうだった！食欲に負けちゃった！食い掛けだけど写真を……」

SE スマホのシャッター音

光雄「えくと口に含んだ瞬間の味は、えっと

）……」

ジョウ M 「色々と間の抜けた地球人だな。調査し甲斐が無さそうだが、隊長への報告の事を考えると……仕方ない」

ジョウ 「光雄。金銭面は俺が何とかするから、お前は取材というのを続けてくれないか？」

光雄 「急に口調変わった！？え待って。それ本当ですか？」

ジョウ 「ああ。お前は遠慮なく取材をして漫画を描いてくれ」

光雄 「有難いですけど……本当にいいんですか？」

ジョウ 「ああ。お前を調査するには、自由にさせるのがいいと思ってな」

光雄 「言い方が怖い！調査？取材じゃなくて？」

ジョウ 「賛成か反対、どっちだ」

光雄 「さ、賛成で！」

M

ジョウM「調査対象は決まった。後は取材とやらに付き合っつてその様子を観察する、そして報告。うむ、妥協しまくつたな」

SE 走行中の車内

光雄「車まで用意して頂いて、なんかすみませんね」

ジョウ「気にするな。それで、まずは何処に行けばいい？」

光雄「そうですねえ：よさそうなお店：」

SE 着信音

光雄「ちょっと失礼します：げ、担当さんだ」
ジョウ「グルメ漫画の発案者か」

光雄「もしもし、お疲れ様です。いえいえそちらこそ、お忙しいところわざわざ」

ジョウM「相手が目の前に居ないのに頭を下

げるのは何故だ？」

光雄「あく進捗ですか：：ええもうバツチリ
順調です！出来上がりしましたら持ち込みま
すね。はい、失礼しまーす：：ふう」

ジヨウ「順調には見えないが」

光雄「スランプなんて言えませんよ」

ジヨウ「言ったらどうなる？電気檻に放り込
まれるのか？」

光雄「どんな罰ですか！そうじゃなくて：失
望されたくないんですよ。失望されて、見
放されて、漫画を描けなくなったら僕も
う：：：」

ジヨウ「漫画を描けない辛さはわからないが、
それ以前に、担当というのは簡単にお前を
見放すのか？」

光雄「っ：それは」

ジヨウ「で、何処に行けばいい？」

光雄「あなた本当に急ですね！？それじゃ：
あのお店！美味しそうなありそうですね」

ジヨウ「あれは：豚肉料理専門の店か？」

S E 腹の虫が鳴る

光雄「へへ、実はさっきのじゃ足りなくて。

ちよつと肉を食べたい気分でした」

ジヨウ「構わない。よし行こう」

S E 走行音 〽 F O

店内

光雄「何を食べよっかな。好きに食べてい

いとなると迷いますねえ」

ジヨウM「俺は食事など摂取しなくていいの

だが。ま、珈琲ぐらいは頼んでおくか」

光雄「すみません、この『元気豚のポークス

テーキ』を下さい」

ジヨウM「なに！？食材になったのに、元気

だと！？解体されても生きているのか？地

球の豚も生命力凄いな！？」

S E 鉄板でジュージュー音を立てる

ポークステーキ

ジョウ M 「やっぱり死んでるじゃないか。

どこが元気なんだ？…ああ、ブランド名。

元気も鉄板の上じゃ、そりゃ無意味だよな」

光雄 「写真を撮って、いただきます！（食す）柔らかく、よく火が通っていて…えつとえつと」

ジョウ 「語彙力が無いのか？普通に思った事をメモしておけばいいだろ」

光雄 「そ、そうですね。（食す）うくん美味しい！」

ジョウ 「死んだ豚はそんなに美味しいのか？」

光雄 「嫌な言い方しないで下さいよ！美味しいですけど」

ジョウ 「そうか…ちよつと手洗いに行ってくる」

光雄 「（食しながら）いっふえっふあふあ〜い」

S E トイレの個室のドアを閉め、鍵

を掛ける

ジョウ「ウォッチ。コール」

ウォッチ『通信相手を指名して下さい。なお、

現在電波の状況が悪い為、音声のみとなり

ますが、よろしいですか？』

ジョウ「また？オーケー。隊長に」

SE ノイズ音から「ポオン」とい接

続音

隊長「ん？このコード番号、ジョウか？」

ジョウ「は。また電波状況が悪い様で、申し

訳ありません」

隊長「そうか。で、何用かな？」

ジョウ「調査対象が決まり、現在調査中です」

隊長「おおそうか！どんな地球人だね？」

ジョウ「死んだ豚を食べて喜んでます」

隊長「……何それ？」

ジョウ「今夜改めて調査報告致します。それ

では」

S E 「ブツツ」と接続が切れる

ウオツチ『報告が雑過ぎませんか？』

ジョウ「お前はもう少し電波を頑張れ」

ウオツチ『ところで、金銭面の件ですが…』

ジョウ「後方支援課から必要経費としてじゃんじゃん貰ってるが、どうした？」

ウオツチ『「急過ぎるし多過ぎる」というメッ

セージを預かっております』

ジョウ「後で詫びのメッセージだな…」

S E 店内

椅子に着席

光雄「お帰りなさい。追加注文しちゃいまし

たけど、大丈夫ですよね？」

ジョウ「大丈夫だ。それ、なんという料理だ？」

光雄「ミミガーサラダです。豚の耳って食感

いいですね」

ジョウ「ミミガー……豚の心の悲鳴を料理名にしているのか。ネーミングセンス凄いな」

光雄「僕も最初聞いた時はそう思いましたよ」

ジョウ「豚の悲鳴料理は美味いか？」

光雄「他に言い方ないんですか！？美味しいですけど」

ジョウ「次は何を注文するんだ？」

光雄「さすがにもうお腹一杯になったので、今日の取材はここまでですね」

ジョウ「そうか。明日は何処を取材するか、目途は立っているのか？」

光雄「さつき調べたら良さそうなお店があったんですが……遠くて」

ジョウ「長時間の運転は平気だ。72時間程度なら余裕だ」

光雄「化け物ですか！？僕、腰痛めますよ」

ジョウ「そうなるとうちやんと休める場所……宿が必要か。よし何とかしよう」

光雄「さすがに申し訳ないですよ！食費だけ

でなく宿泊費まで：車中泊でいいですから」

ジョウ「では、激安の宿泊施設でどうだ？申

し訳なさはこれで半減するか？」

光雄「っ……わかりました。お願いします」

M

ジョウM「地球人は皆、世話になるのをためらう習性でもあるのか？俺達はその後、店を移動して、安い宿泊施設に着いたのだが」

SE カーペットの上を革靴で歩く

ジョウ「安い割にはなかなかだな。ベッドが

無駄に大きいが」

光雄「ラブホですからねえ！！？何でここを

選んだんですか！」

ジョウ「六時間コースというのじゃダメだっ

たか？ならば別のコースを……」

光雄「そういう問題じゃなくて！」

ジョウ「ビジネスホテルは見当たらなかったし、この時間帯だとどの旅館も閉まっていたからな」

光雄「気まずいけどここで寝るしかないかあ」

ジョウ「シャワーを浴びてきたらどうだ？衛

生面を侮ってはいけないぞ」

光雄「ここでそれ言われるとなんだか…まあ、浴びて来ますけど」

SE カーペットを歩いてバスルームに入る

ジョウ「よし、今の内に。ウォッチ、隊長に

コール」

ウォッチ『電波状況が』

ジョウ「音声だけでもいい。報告がしたい」

隊長「ジョウか？え、また音声だけ？」

ジョウ「繋がるのは早いな。そうです。本日の報告を」

隊長「ああ、さっきの続きか。ちよっと詳しく

く教えてくれ。どんな地球人を対象に選んだのかね？」

ジョウ「漫画家という職業の地球人です」

隊長「漫画家：知っているぞ。クリエイター系の職だな。え、それが死んだ豚を食べて喜んでいたのか？」

ジョウ「とても喜んでました。ついでに豚の悲鳴も堪能していました」

隊長「……やばくない？大丈夫？」

ジョウ「危害は加えてこないと思います」

隊長「その地球人、今はどうしてる」

ジョウ「現在、私と共にラブホテルに泊まりシャワーを浴びています」

隊長「本当に大丈夫！？」

ジョウ「なるべくストレスを与えたくないの
で、衛生面にも気を配ってます」

隊長「衛生面以前の問題があると思うぞ！君、
自分を大事にしたまえ」

ジョウ「危険度は低いかと。必ず生きて調査
結果を提出します」

隊長「必ず生還するんだぞ！」

S E 接続切れる

ウオツチ『誤解されたと思われませす』

ジョウ「事実を言ったのだがな？」

ウオツチ『一言少ないと言われませんか？』

ジョウ「よくわかったな」

光雄「ふう、サツパリした。誰かと話してま
したか？」

ジョウ「知り合いとな」

光雄「ああ、ルポライターですから編集者か
情報提供者とかですね」

ジョウM「そういえばそんな設定だったか。

その後、隊長の心配など関係なく何事も無
く時間は過ぎ、俺達は眠りにつく事に」

M

S E 布団にくるまる

光雄「おやすみなさうい」

ジヨウ「ああ」

光雄「ところで青森さん、一つ訊いていいですか？」

ジヨウ「さっきの「おやすみなさい」はフェイクだったのか？質問によるな。なんだ」

光雄「青森さんはどうしてルポライターになったんですか？」

ジヨウ「そうだな：一言で言うなら「感動するモノに出会いたかった」からだな」

光雄「どういう意味ですか？」

ジヨウ「この星には未知なモノが多い。その中にはきつと、俺が心揺さぶられるモノがあるとあった。だからこの仕事を選んだ」

ジヨウM「勿論これは、調査員としての答えだ。この星を宇宙から見た時、そう思えた」

光雄「なんか、思ったより壮大ですね。その感動するモノには出会えましたか？」

ジヨウ「感動はともかく、心揺さぶられまくったな。今日だけでも」

光雄「そうですか。青森さん、あんまり表情

変わらないのでわかりにくかったけど、収穫はあったみたいですね」

ジヨウ「お前はなぜ漫画家になった？」

光雄「：やっぱ僕にも聞きますか。僕の場合は単に、描くしか取り柄がなかっただけですよ」

ジヨウ「描くしか？」

光雄「昔から運動も勉強も優れた分野がなくて：。でも、漫画を描いてる時はいつも夢中になれたんです」

ジヨウ「夢中になれたからといって、優れているとは限らないんじゃないか？」

光雄「っ！？：：学生時代は趣味で済ませていましたが、周りが就職活動で忙しくなつた時は焦りましたね。このまま漫画を描くべきかどうか」

ジヨウ「漫画を口実に出来る分野を増やさなかつたのか？」

光雄「っ！！？そ、そこで決めたんです。よし、プロの漫画家になろうと」

ジョウ「人生の選択肢を狭めたのか」

光雄「あなたさつきから容赦ないですね？！

まあ、その通りですけど！」

ジョウ「確か学生時代から、いくつか連載していたな。短編だが」

光雄「どうしてそれを…ああ事前調査ですか」

ジョウ「まあ、そういうとこだな」

光雄「有難い事に、投稿したのが受賞しましたね。今の担当さんとはその頃からの付き合いです。親身にアドバイスをくれました」

ジョウ「もう親身じゃないのか？電話でスランプの相談をしなかったが」

光雄「その…不甲斐ないと思うようになりまして…いつもアドバイス貰ってばかりで、僕一人じゃ何も出来ないんだな…と」

ジョウ「担当が言ったのか？」
光雄「いえ、僕の勝手な想像ですけど…」

ジョウM「思い込みで自分を責めるのはこの男だけか、地球人全員がそうなのか、わからんな」

光雄「もう寝ましよう。明日の運転に影響するといけませんから」

ジヨウ「96時間は寝なくても活動に影響はないが？」

光雄「冗談ですよね?!」

M

S E 走行中の車内

光雄「ふあく。朝から運転ありがとうございます
ます」

ジヨウ「気にするな。朝食はどうする?あの
ホテルを出てから何も食べてないだろ」

光雄「コンビニとかあればいいですけど:
ん?喫茶店がありますね」

ジヨウ「開店してるみたいだぞ。オープンの
札が掛かっている。営業熱心だな」

光雄「え、この距離から見えるんですか?
ジヨウ「俺は最大12キロ先まで見えるが」

光雄「あなた本当に人間ですか!?スペック

高過ぎませんか？」

ジヨウ「……ルポライターだからな」

光雄「ルポライター関係あります！？え、知らなかっただけで、ルポライターってそんな超人ばかりなんですか？」

ジヨウ「俺の知ってる同僚は皆そうだ」

光雄「へー。ルポライターすご」

ジヨウM「調査員は皆そうだ。…実際のルポライターはどうか知らないが」

ジヨウ「それで、あの店にするか？」

光雄「はい、お願いします。一度やってみたかった事もあるので」

ジヨウ「やってみたかった事？」

光雄「朝カレーですよ！モーニングランチではなくカレーです！」

ジヨウ「朝からカレーなら、喫茶店でなくともできるじゃないか。レトルトでも」

光雄「喫茶店のカレーってなんか家で食べるのと一味違うじゃないですか。折角ですからこの際に」

ジョウ「今までは出来なかったのか？」

光雄「金銭面と漫画でそんな余裕なくて…」

ジョウ「ま、カレーの取材がしたいならさせ

よう。俺は取材しているお前を観察する」

光雄「あの、気になってたんですけど：僕は

何かの調査の対象になってるんですか？」

ジョウ「お前は好きなようにカレーを食べて

くれ。それが俺の仕事に役立つ」

光雄「ルポライターの謎がさらに深まりましたよ！」

SE 走行音 〱 FO

店内 レトロな音楽が流れている

光雄「いいですねえ！いかにも純喫茶って

感じで！落ち着きます」

ジョウ「時代感覚が他の店と違うな。どんな

仕掛けだ？」

光雄「こういうお店にいと、ちよっとお酒

落な気分になりますよね」

ジヨウ「気分だけな。お前がTシャツにジーンズという姿は変わらないぞ」

光雄「ちよつとポーズとか決めたくありませんよね」

ジヨウ「足を組んで頬杖をつく：そんな姿勢でこれからカレーを食べるのか？」

光雄「少しは雰囲気味わいましょうよ」

ジヨウ「注文した物を食べられればそれでいい。飲食店とはそういう場所だろ？」

光雄「恐ろしいほどドライですよね青森さん」

ジヨウ「ポーズを決めて何が変わるんだ？外見も料理も変わらないぞ」

光雄「このお店に似合うお客さんになるというか：なんとというか：ほら、あそこに居るお客さんみたいに：：あああ！！？」

ジヨウ「どうした？あの男がなんだ」

ジヨウM「仕事が早そうなきりつとした雰囲気。体型や身だしなみも整っている。あの男が何だというのか」

光雄「（小声）しゅ、出版社の担当の人です」

ジヨウ「そうだったのか。よし、呼んで来る」

光雄「なんでそんな事するんですか！？」

ジヨウ「順調と言ったのに全く漫画を描いてないからな。ここは発案者の協力も必要だ」

光雄「やらなくていいですよ！とりあえず逃げましょう」

ジヨウ「なぜだ？あと、カレーもまだ来てないぞ」

光雄「それもいいですから！」

担当「やっぱり進んでいませんでしたか」

光雄「いつの間に？！しかも聞かれてた！」

担当「そりゃ、あんな大声出してたら気づきますって……えっと、そちらの方は？」

光雄「ルポライターの青森さんです」

ジヨウ「どうも」

担当「ああ、インタビューを受けると言ってもらったね。本当だったんですね。てっきりまた新作が進まないのを誤魔化してるのかと思ってました」

光雄「信用性薄っ！というか、何で担当さんがこのお店に？」

担当「家の近所だからです。朝早くから開いてるので、出社前にここで朝食を」

光雄「そ、そうでしたか……」

担当「なぜライターさんと一緒なのかは置いておくとして、ここで何を？ご自宅はここより遠い筈ですよね？」

ジヨウ「次の漫画の為の取材らしい」

光雄「グルメ漫画を描くのに料理の資料が欲しくて」

担当「本当は取材とかこつけて、美味しい料理を食べたかっただけでは？」

ジヨウ「恐らくその通りだ」

光雄「ちよつと青森さん！？」

担当「はあく……やはりそうでしたか」

光雄「すみません……」

担当「大和先生、私は別に怒っているわけではありません。私は……そんなに頼りになりませんか？」

光雄「え？」

担当「私は大和先生の描く漫画を、多くの読者に読んで頂きたいんです。その為にはダメ出しもしますが、大和先生の漫画を世に広めたいのです」

光雄「僕の…漫画を…」

担当「大和先生にはセンスがある。それが私がおわっているつもりです。ですから、どんどん描いて見せて下さい。一緒にいい漫画を作りましょう」

光雄「た、担当さん…：僕の事をそんな風に思ってくれて…」

担当「まあ、その分ダメ出しはちゃんとしますので、覚悟を」

光雄「ぐっ！！？」

担当「でも、大和先生もいい漫画を描きたいですよ？大和先生の持ち味を、私が引き出せるよう尽力します」

光雄「僕の…持ち味」

担当「もっと私を頼って下さい…：それとも、

担当は私じゃない方がいいですか？」

光雄「そんな！？僕がこれまで連載できたのは、担当さんのお陰です！今から他の人に変わるなんて！」

ジョウ「口を挟んですまないが、一つ訊いていいか？担当とやら」

担当「え、はい、何でしょう？」

ジョウ「いい漫画というのを世に広めたいなら、この男の漫画を待たず、自分で漫画を描けばいいんじゃないのか？」

光雄「あ」

担当「ぐつつ！！？」

ジョウ「お前の望む漫画をお前が描けばいいのでは？」

光雄「青森さん、ちょっとそこまでに！」

担当「ええ、まあ、私も昔は漫画を描いてましたよ。いまはただけどね？全く上達しなかったんですよ……しかしですね？」

光雄「あくが始まっちゃいました。担当さんの自虐モード」

ジョウ「自虐モード？」

担当「でもですね、せめて漫画と関わっていたいと思ひまして現在の出版社にいるわけです。往生際が悪いですよねえ…は、ははは、ははははは…」

光雄「一向に絵が上達せず、挫折したみたいで未だにその時のショックが癒えていないようです」

ジョウ「自分は下手なのに他人の漫画に文句言うのか？」

担当「(咳き込む)」

光雄「そこまでにして下さい、青森さん！！」
ジョウM「ところで、さっきからマスターがいつカレーを提供していいのか悩んでいるのは、言った方がいいのかどうか」

M

担当「大変お見苦しいところを見せてしまい、失礼しました」

光雄「いえ、むしろ心の傷に塩を擦り付けて
しまい……」

ジョウ「カレー食べないのか？冷めるぞ」

光雄「カレーどこじゃありませんよ！？あな
たが原因ですからね？」

担当「(咳払い)大和先生。私はあなたがスラ
ンプに陥っても失望しませんし、見放した
りしません。そこは信じて下さい」

光雄「はい！」

担当「現在のネームの進捗具合は？正直に」

光雄「皆無です。料理の感動体験がまだ足り
なくて……」

ジョウ「早くカレーを食べたらどうだ？」

光雄「ですから青森さん！」

担当「食べて下さい！それが漫画のネタにな
るなら！」

光雄「わ、わかりました！いただきます！（が
つつく）」

担当「美味しいですか？」

光雄「ちよっと冷めてますが美味しいです！」

担当「ちゃんと味わってますか？」

光雄「勿論です。もっと堪能したいです」

担当「マスター！カレー大盛りを追加で！私が払います」

ジョウ「金銭面は俺が」

担当「青森さん、貴方の取材はまだ続きますか？」

ジョウ「……いや、大分調査できたし、もういいかなと思いつめてる」

担当「そうですね。ここまでご苦労様です。

後は我々の問題ですので」

ジョウ「ああ。光雄、協力ありがとう」

光雄「にえ、ふおひいふあふおふお……」

ジョウ「返事はいらん。食べてていいからな」

ジョウM「さて、後は隊長に報告するか」

S E 車のドア閉める

ジョウ「ウォッチ、隊長にコールだ。もう音声だけでいいから」

ウォッチ『お繋ぎします』

隊長「音声だけ……ジョウだな」

ジョウ「慣れましたか」

隊長「まあな。それで、報告でいいかな？」

ジョウ「はい。一段落したので」

隊長「おおそうか！ようやく君から調査報告を聞けるのか！待たせ過ぎの気もするがいだらう」

ジョウ「では、漫画家という地球人の調査報告を」

隊長「うむ」

ジョウM「なるべく簡潔に報告しよう。その方が時間短縮になっていいだらう」

ジョウ「漫画家は……娯楽物を作る為に死んだ豚を喜んで食べ、悲鳴まで堪能し」

隊長「ん？やっぱりそこおかしくない？」

ジョウ「己の過小評価を恐れ、仕事仲間に虚偽の報告をし」

隊長「え？そいつ、ダメな奴の類い？」

ジョウ「他の職業に就ける可能性を、都合の

いい口実を作って就かない」

隊長「ダメな類いかもだな」

ジヨウ「そして虚偽の報告が仕事仲間になれると、信頼関係が確立します」

隊長「……んんん？仲良くなるのか？」

ジヨウ「仕事仲間はその後、朝からカレーを食べさせます。しかも、おかわりは大盛りで」

隊長「すまない。もう頭が理解するのを諦め始めたぞ」

ジヨウ「結論。漫画家という地球人は食文化に異常過ぎる執着を持つ！」

隊長「感想を言ってもいいかね？」

ジヨウ「どうぞ」

隊長「他の調査員よりおかしな人種を調査したねえ！」

M

完